

合田強の『西洋医述 五』の解題と翻刻

板野 俊文、田中 健二

香川大学

はじめに

本稿では、江戸中期の讃岐の医家であった合田強⁽¹⁾（一七二三～一七七三）の著した『西洋医述 五』について述べる。これは強が宝暦十二年（一七六二）正月より同閏四月末まで長崎を訪れ、阿蘭陀大通詞である耕牛吉雄永章⁽²⁾（一七二四～一八〇〇）と、その弟の蘆風吉雄永純の成秀館で学んだ講義録であり、五巻からなるものなかの最終巻である。この講義録をまとめて一巻として残された本が『紅毛医言』である^(3, 4)。この中の『紅毛医言』⁽⁴⁾と『西洋医述 卷三』⁽⁵⁾『西洋医述 卷四』⁽⁶⁾に関しては、既に我々が報告した。重複を避けるため必要な説明以外は他にゆずる。先行論文を参考にしたい。

巻五の特徴はカテーテル、灌腸、兎口の手術等の図が挿入されていることである。特にカテーテルはその後、多くの人々に使われて、特に産科の分野では大いにその威力を発揮する⁽⁷⁾。

本論文の目的は、江戸中期の阿蘭陀医学がどのようなものであったか、また吉雄耕牛の医学的な知識がどれほどであったかを知ることである。またそれを書き残した合田強の業績を顕彰することである。

凡例

- 一 この書は吉雄耕牛の講義録の五巻中の五巻（『西洋医述 五』）である。
- 一 今回、翻刻したのは香川大学附属図書館医学部分館に所蔵されている複製本であり、これは、原本のコピーを製本したものである。
- 一 本文は漢字とカタカナで書かれているのでそのままの形で翻刻した。また見え消しは原文に従った。
- 一 本文中日本語の横に書かれているオランダ語の発音は本文のポイントより小さいポイントを用い、日本語の横に書いた。また説明の部分も同様にした。大きい字で書かれている部分は本文よりも大きいポイントを用いた。

- 一 筆者の註は()を用いて表した。
- 一 図は原文を元にして写図を作成した。
- 一 解説不明な部分は□を用いて示した。
- 一 消した部分は■を用いて示した。

翻刻

(表紙)

自閏四月廿三日至同二十六日

明和丁亥追記 (註 一七六七)

○外治道具 猪股理兵衛 廣瀬ノ姪也 吉雄家之道具作

○^{クマシロ}神代彦之進⁽⁸⁾ ハ蟬虎⁽⁹⁾ノ上手也

西洋医述 五

(本紙)

(註 やや大きめの字で書かれている。全五巻のまとめと思われる)

汗法 吐下 傷寒 疫

瘡 痢 中風 卒倒

腫脹 水腫 疝 石淋 狂癩

狂犬病 梅毒 咳嗽

小便閉 黄疸 療

嘔吐 反胃 嘈雜 痞滿 痞

吐血 膈噎方 咽喉痛 癩

瘰癧 温泉 鼓脹 眼目 経閉

痘疹 種痘 取血^刺 産前後 半産

薬選 蔵府骨節図

出上巻ノ次

四月廿四日

石淋 論見前 治方 使病人眠也 大便難易通者 吉使病人喜之一

身ニ充滿之湿 可去之 若未解者

方 イーンドノ水 ア、クワ。フニケレイ ヒヤスコルデフラカスト

ラプサンブシイ 各一匁^{右三味} ○△野菊花^{クロフレスカモメイリ}

タツノ膏

右如煮茶煎 ラウダアノ。ヲヒヤアト三厘 ヲ、リ

△又方 ヲ、リヨムエネイプリー ユニ ラプサンブシイ 一匁五歩

右 菊花湯へ入レ用

此アト肛門突薬

突薬方

ヘルバヒスマルハ ヘルバ。リウタ

クロフレスカモメリ 各半握 セイメンアニイシイ 茴

セイメン^ク コミキニイ 各二匁 アヽクワマリキナ 見合入 六十
四匁ニ煮

メリアルビイ
蜜 十六匁 胡麻油 見合入レ

右八味突入于肛門 痛和而後察 石淋 欲出

之則用後方

其方 ヲクリカンケリイ 六分五厘 サルプルネリ 三分三厘

コロシイ 一分 ヲヽリヨム土ネイフル^{ユニイヘリイ} 三滴

右 為末

又方 バルサム^{トツハナチイ} コツパイハ 四匁 鶏卵黄 一

アヽクハホルデ 四百八十匁 砂糖 見合
大麦粥

右四味 此薬一日 三度用 大便順通

方 不大便者用之通大便

ゴムテレマイデイナ 三匁 大黄末出後二匁 砂糖少加
脂

右三味為末合 一度六分五厘迄用 壹匁迄

又方 ラブサンヅシイ^{二匁} 大黃ノ末七分

マアシユスヒヨロシス 一分六厘 マアシユス シコロフル 半

又方 ゴムアモニヤカ 三分 レシイナフラ[■] ハア 一分五歩

ヲヽリヨムシクシナイ^ニ 三漆

右 為丸 若不取血歟 若病人健ニシテ 血氣氣強 肥滿者 取血^主 脾^主

筋ヨリ 血ヲトル也 ○此病人有熱 小便赤者

一方 同□

カン草 八匁 ヘルハビスマル葉 一握 ■ 胡麻仁 二匁

白之

蜜十六匁 大麦ノ粉ノネリ湯 百九十二匁

ラアビスクルエイラ 一匁 ロフサンヅシイ十二匁

右八味 鶏

マヒ油^ニ 胡麻仁 十六匁 砂糖見合

右 三味以ヒ服^{コレヲ服ス} 不 バルサムシヨロホウリス 一二滴入ル也

一方

製法物

バルサムシヨロホウリスアニサアト

茴香 硫黄

フトヲ酒也
一滴酒中ニ落シ入テ飲
又ハ蜜水ニ入テ服

尤モ外治アリ略ス

行リノ悪クシテ膀胱ニ小便ノイタラヌ也(註 横書き)

○膀胱マテ小便ノコヌ時ハ如何ヽスルソト問 此難儀ハイカヽシテ治ソ

其時ハバルサム^{シユルフリス} ヲルヲワリ テレメンテイナ十滴

製法物

ヲヽリヨムシユリシニイ コハクノ油也

ヲヽリヨムユニブリイ 各六滴 砂糖少 極上焼酒八匁 | 此五味ヲ交合

セネイフルノ油也

吞スル也

是ヲ吞スル早速肛門ヨリ前キリ前ニ記アル突薬ヲ温メ入ル 病人ノタイ
テイコラヘノ成様ニシテ入ル也 腰ニハ塩ヲイリ温メテアツル也 夫ニ

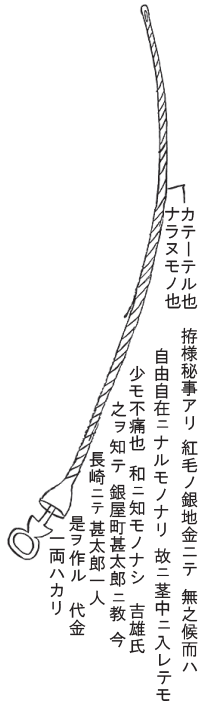
閏月廿三日ヨリ

テモ不通ノ時如何スルソ 其時ハ〇小便ツマリ不通ノ時ハ
アンギトヲルカントアリイテスヲ拵用ル也―焼酒ニ是■葉ヲ甘滴程入レ吞スル
焼酒トカントアリイテスト天火ニアテ晴氣ヲ呼出タルモノ也
班ミヤウ也

班ミヤウ也

焼酒六十四匁 班ミヤウ一匁 但荒クツキ布ニ包ミ一昼夜火ノソハカ竈
ノ前ニ置 精氣呼トリ出也

此葉朝夕細イ猪口ニテ一匁ツ、用ル也 用ル時ニハヲクリカンキリ五分
極末シテ加用ル也 平生ハ大麦之粉ノ練リユ也 〇トリ湯ニ砂糖十分ヲ
加 サルフルネル十分ヲ加 飲ヨキ様シテ飲スル 尤ヲ、リヨムユニフ
リイ一滴カ又ハハルサムシユルフリステレメンチイナ一滴宛入飲スル也
夫ニテモ小便不通膀胱ニ滿充テ通ヌトキ



咽頭痛

アンギイナ
フエ
氣道又ハ

咽ノ中ビク。頭ノスピイルト云物ガ痛 氣道食道トモニ痛 病ニ輕重ノ
二カアルナリ 呼吸ニサワリテ 食ヲ□ノミ込ニサハル 此病ノ類ハナ
キカ 曰 外ニモ二通アル 實ニ重キガアルナリ

スヒルト云物カ痛 スヒキルハ頭ニ統テアル也 病ノ輕キハ食道會厭ア
腫

ゴガコハリテ物ガデキル也 私ハ病ノ實シタルヲ聞タシ 甚咽カ閉テ呼
吸苦ク食ヲノミ込事難也 水飲不レ入 若飲入則自鼻隨出 咽中悉皆痛
甚發熱也 〇虚ノ輕ハ食道之口會厭共ニ生レ瘡而腫 飲食之時痛 熱カ
少有是輕也

〇治術如何 痛出スピイルニ痛フエ頭ニ統テ痛 氣息短 咽腫閉 咽不
通者誤治則不治 咽口首腫大痛可治也 筋ニハアト又ハキリイルト云筋
カツマルテ不順也 是危篤ノ病也 不時ニケガラシ 魚咬 或ハ過テ木
ナトヲ咽ニ立ル 術ハ此時ニハ下藥ヲ以テ下ス也
其法ニ云

レシイナヤラハア シカモウネ 各シコロフル半 キリモリタルタリ
イ シコロフル二

右三味 為散 服白湯

又方

エツキスタラクトカトリシイ シコロフル一 上燒酒
スヒイルテスヒキニイ 見合

製葉也

製葉也

製葉也

製葉也

右二味散服 コレニテモ咽ノ不和物ハイカン 又 肛門ヨリツキ薬スヘシ

突薬 ア、クワマリイナ 六十四匁 メリイアルビイ 白蜜 十六匁

ホルト 油 見合

又方 リシヒイバルビイトンソル 六十四匁

砂糖 サガアリイ 十六匁 塩二匁 油 見合

右温以射蜜器突入也 不取血曰 血多者 足ノミルトア、トルヨ
リ血ヲ取也 餘ハ外治 脾ノ筋



閏月廿四日

ア、デメルラアテン
取血

△取血時有血止以巾洗熱湯洗鍼口 則血即出若面色變為眩暈者速可止血
血多色赤 肥者可多取血 虚者可小取血 欲止血時去卷巾則血止 左ノ
指ニテ血所ヲサヘ少捻テ上ニ酢巾ヲ置卷 木綿ニテ卷ヲクヘシ 跡ニ
テ茶一盃可飲一口 可令保護安臥 青時將氣絶者

○手ノ脾筋首筋ヨリ血ヲトルハ メラシカウワリヤ 癩症 「此病脾臟カ鬱滯スルト心肝肺
トモニ病ヲナス」 脾カ塞ルト悲ムコトヲコル 脾カ塞ルト癩症ヲナス
ナリ 是上部ノ病也 腕ヨリトルハ能出也 外ハサノミ不出也 懷婦ハ

手ヨリ取ガヨキ也 若手ノ筋不見者ハ以熱湯洗手則摩手ノ筋則見 以巾
結腕□後也 結者不欲去血故也 若血不出者 直浸湯即出也

○足部治不通經水 經閉 足小瘡 頭痛 眼痛 ○懷妊誤鍼則半產必可
慎故為妻者諫不可鍼也 婦人之病多取血治經閉 凡治上部之諸病スベ
ニア、ドルノ塞必取之 エ

○眉見 ヘイナホロンテス フタイノ筋ヨリ血ヲトル ヘナアアテンポウレム
フタイノ筋 コメカミノ筋ノ事



大頭痛或 本中□頭重氣鬱不開 凡頭中之鬱必取之 コメカミヨリ取カヨ
シ項ヲシメル時ハ血カヨル也 血カ目口ニ不入様ニスクイ去ヘシ 多ハ不
出 少々タラク出也

(註 この間数行空白)

四月十一日開

△血味 無病人血者 味鹹而有硫黃之氣

有苦味者 膽強人也 有辛味者 氣性急人也
無鹹味人者 髓腦少瘦者也

(註 この間数行空白)

○セドアリイ 形



物破ル、事 腹ト云事
シキフルボイコ

閏月廿六日

此病決非梅毒 一身之皮弱ル ナユ 勢氣弱上部之府大 フトル 腰足腫骨節腫 足

節腫曲ル 齒腐テ落 頭面亦腫 外ノ節々ハ瘦細ル 此病無小兒 九月已下ノ生

後二年半之後有此病

一説曰 頭痛強時々氣勞倦 頭鳴目霧 變急不仁涎牙クキ腐齒揺 氣息

臭氣甚 胸乳下甚痛 呼吸短息痰カハキ 脉無倫次 心氣震 或卒倒

懼而氣絶 此病有下集 自是起百病 心中懊惱將吐 少腹雷鳴 胃脹痛

疝氣痛無定處 或下利 或下血 或便秘 小便赤濁 或清白 夜骨節大

痛 腰痛肌膚為黑班 自諸病為此病 此本ハ惡食物カ胃中ニ滯 其氣ガ

脾ヲ塞ク 骨髓肉血皆腐 血不順 此本自飲惡酒起 病根知難シ 先臟

府ヨリ起枝々ノ物身ヘ行也 オチカウリイ 糲ニナル事 ○脾ヨリ起 云ガ五人計ノ説ナリ 脾ニ

痰ノ如モノ絡レタル故ニ脾ガ塞故ニ肝モ塞ル ソレヨリ一身カ腐テクル

脾カ塞ト云ハ 癩ノメラカウリイノ事也 脾ニ連ル脂カ化シテ血ニナル

ガ常也 病ニナレハ血ニ不化シテ シキウルボイコニナル也 氣重キ癩

ヨリ此シキウルボイコニナル事見合カタシ 脂ガ血ニ化スルト 病カ起

ラネドモ脂ガイタムト肝脾トモニ病デクル也 脾ニ付タ脂ハイツモ不乾

モノ也 乾カヌ故ニ血ガアル也 乾ト血ハヘル也 塩肉食スルト肝筋迄

モ此潤ガ行也 ソレカ塞リテシキウルボイコニナル也 (註 改行の合点

あり)

シカイエルスラクア、ドルト云筋ガ腸ヨリ脾ニ行ナリ 此筋力鬱塞スルトシキウルボイコニナル 此病ハ大熱ニシテ物ヲヤキコガス如キ病ナリ 此シカイエルスラクア、ドルノ筋ガ閉塞スルト血ノメクリハナクナル也 此シキウルボイコガ人ニ移ハ 腠理ヨリ入ル熱不徐者ハシキウルボイコニナル 海中蒸氣上ル人カソレニ犯 又ハ泥ヨリ蒸氣上リテ此ニ犯レテシキウルボイコニナル ○熱カ中ニ有テソレヨリ此病ニナルアリ 又此病カ小兒ニアルハ多ハ親ノ遺毒也 我友ニ一兒アリ 親病身ナリ 兒腰痛 皮膚斑文 齒クキ腐テ シキウルボイコニナレリ 其親精氣腐テ其毒中ヨリ生シ子ユヘ故ニ如此ヤム也 此病口ヲ吸テモウツリ 又床ヲ同シテネテモ移ルナリ

此病感邪不発汗腠理塞閉 則為此病○海上ヨリ立氣如黒青霞 非常色者諸色皆邪氣也 身ニ有硫黄塩之氣者必病 此病者多矣 家濕泥之邊河海之邊者 又坐濕壁者 為此病 亦病黃疸 病熱病之後為此病者 大熱如灼 元氣減散硫黄氣盛 身益瘦 塩之氣亦腐 血如灰汁成 外ノ病ニテ長ク牀ニアル者 其后又此病ヲナス 聞病人ノ息近側 受病人ハ氣ヲ

■則染軀中之塩硫之氣カゲイルヘ入テ熱甚而終ニ此シキウルボイゴトナル ケイル 臟府ハ脂ガヘリテナル也 或潤ナク乾物 鹹甚者 或燒酎多飲 或猪魚肉之類不断食者 多病 ヤキ 若山羊乳汁有潤菓之類食者不病レ之也

○又白膽府凶膽汁流入腸中 則肝脾塞而為此病○肝道塞灼而為此病○脾

病 ヨハキ人ト云事也 △脾病ハ黒膽勝ノ人ハ常不多言 好靜所 此人不易治

板野 俊文、田中 健二——合田強の『西洋医述 五』の解題と翻刻

易肌而多食 腸鳴腹脹 涎不絶 左脇脹常有動氣 呼吸重 心怔忡
 欲氣絶 其人嫌^レ死 目如瞶 常易懼事無決断時氣重不語
 或如狂筋牽節々痛拘急手掌熱■ミルトシユクト也 自之為ニシキウ
此病ハ自手母筋取血一名メランカウリヨム
 ルボイコト

此痢十年許不治者多矣骨筋痛痺攣急後為テイリンキト
エ 勞
 死於是解臟見之知之⁽¹⁰⁾

閏月廿六日 取筆

(註 次の半丁空白)

四月十一日

兔口治法 始長刀 ハサミニテ双方トモニ切

血多出トモ不可驚 金鍼ニテ縫

鍼ヲ其儘ヲキ糸ヲ繰カケ不^レ笑

ヤウニ双方ニ卷木綿ノ枕ヲヲキ上ヲ

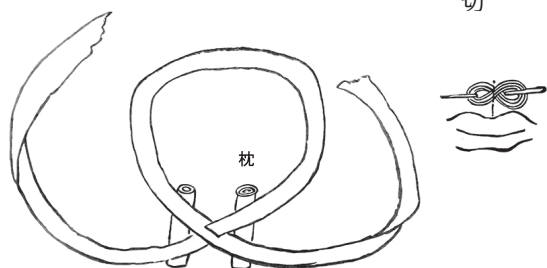
木綿ニテ項ヨリ廻シ卷ヘシ

△卷木綿⁽¹⁾ 圖ノ如シ此通ニスヘシ

枕木綿ヲヲケハ肉ヨリテ

シマリヨキモノナリ

膏ヲ易ルトキハ



まとめと考察

卷五の概要をキーワードで示すと以下になる。

- 一 下法および肛門突薬方
- 二 排尿法 (含むカテーテル法)
- 三 咽頭痛および治法
- 四 取血
- 五 シキウルボイコ
- 六 感邪
- 七 兔口治法

第五卷は最終の巻である。

○靡ハ始蒸葉ニテ三日許蒸シテヨシ 膿タラハエケヒシヤコンニテ毒ヲ
 引上ルカヨキ也 内治始ハ発散後可下
(註 此の後の數行は余白)

(裏表紙)

寶曆十二壬午正月廿八日出故國晦申二月十四日来長崎 閏四
 月廿七日去長寄 五月十一日歸故郷 凡百廿 日為旅客也
 崑陵山人

逼塞 シウビン 漢名
 搜瓶 虎口 烟袋

「閏月廿六日 収筆」とあることから、この日まで講義を聞いた後、次の日の二十七日に長崎を去ったことがわかる(裏表紙)。その後、熊本(の)宿で、偶然にも永富独嘯庵と亀井南冥と遭遇し、講義録の概要を話す。強い感銘を受けた両者は長崎に行き、吉雄耕牛の講義を受けることとなる。この逸話は、『紅毛医言』の序文や⁽⁴⁾、永富独嘯庵の『漫遊雜記』『葆光秘録』に書かれている。

富士川游先生は昭和十一年に『温恭合田求吾先生』を発表された⁽⁵⁾。この中で「温恭合田先生の功績は我が医学史上に赫然として、千載不磨のものであると言わねばならぬ。」と書かれている。無論、吉雄耕牛の博識があつたことであるが、著作を残さなかつた耕牛の仕事を知る上で、合田強の残した著作は重要な役割を果たしている。

なお、著者である合田強の名前は求吾が知られているが、この前後の宝暦時代に残された著作には「強 按ずるに」という書き込みがあることより、あえて「強」の名前を使ったことを書き加えておく。

参考文献および注釈

- (1) 富士川游『温恭合田求吾先生』中外医事新報 一二三九号 一〜九頁 一九三六年(昭和十一)。その後復刻再版 富士川游著作集8 富士川英郎 編集 一九八一年(昭和五六) 思文閣出版
- 右の文献から略歴をまとめた。讃岐国豊田郡和田浜生まれ(現香川県観音寺市)。父は合田伝右衛門吉盤。弟は合田大介(蘭齋)。名は強、字は千之、通称求吾、温恭、号は巨鼈、鼈山。幼少の時、合田又玄、高橋柳哲について医を修め、宝暦二年(一七五二)二月京にて松原一閑齋に医と儒を学んだ。宝暦六年(一七五六)江戸にて望月三英につき、山脇東洋による『外台秘要方』の開板の校正に携わった。その後、長崎にて吉雄耕牛・吉雄蘆風に学んだ後、宝暦十二年(一七六二)一月長崎より讃岐へ帰る途中の南肥後で永富独嘯庵・亀井南

冥に出会い、二人に長崎に遊学を勧めた。墓は香川県観音寺市豊浜町和田浜。(2) 片桐一男『江戸の蘭方医学事始 阿蘭陀通詞・吉雄幸左衛門 耕牛』丸善ライブラリー 二〇〇〇年(平成十二) 二三一〜二四〇頁

右文献から吉雄耕牛の略歴をまとめた。

享保九年(一七二四)生 長崎 寛政十二年(一八〇〇)死 長崎 江戸時代中期の蘭方医。吉雄流外科の開祖。初め定次郎、次いで幸佐衛門、のちに幸作、幸載と称す。諱は永章、号が耕牛、養浩齋、成秀館ともいう。長崎の通詞吉雄藤三郎の長男に生れ、少年時代からオランダ商館に出入りして、寛保二年(一七四二)、一九歳で小通詞、寛延一年(一七四八)には大通詞となった。

(3) 長与健夫『合田求吾の『紅毛医言』について』日本医史学雑誌 三十八巻三号 八九〜一〇〇頁 一九九二年(平成四)

(4) 板野俊文、田中健二 合田強の『紅毛醫言』の現代語訳 医譚 通巻一九号 一〇二〜一二三頁 二〇一五年(平成二七)

(5) 板野俊文、田中健二 合田強の『西洋医述 卷三』の解題と翻刻 日本医史学雑誌 第六十二巻 一号 九二〜七五頁 二〇一六年(平成二八)

(6) 板野俊文、田中健二 合田強の『西洋医述 卷四』の解題と翻刻 日本医史学雑誌 第六十三巻 一号 一四六〜一三三頁 二〇一七年(平成二九)

(7) 板野俊文、田中健二 中島洋一 中島友玄の『回生鉤胞(代)憶』を読む 医譚 通巻二一七号 九三〜一一八頁 二〇一四年(平成二六)

弘化三年(一八四六) 山田 庄原磯右衛門内 の部分(中略)

晩後、尿管す。四日、管を以て通利す。三升余り。のち十日ばかり管を施す後、遺尿となる。日を経て治す。

嘉永六丑(一八五三)の部分(中略)

十月 西脇清七嫁 大小腹脹る。小水利せず。(中略) 十四日・十五日、尿管を施す。小水六升余り利す。治す。

このように何升もの小水利すのに用いられた。

(8) 神代彦之進 生年 元禄六年(一六九三) 長崎 没年安永一年(一七七二) 十二月二十八日 長崎

江戸時代中期の長崎派の画家。姓は初め神代のち熊代。名は斐、字は淇瞻(きせん)。通称は彦之進のち甚左衛門。号は繡江。熊斐は漢名。唐通詞の家に生れる。絵は初め渡辺秀石に学び、次いで来朝した沈南蘋に師事。ブリタニカ国際大百科事典を参照した。

(9) 蟹虎 蟹は蟹の異字。虎の斑紋をもった蟹の意か？

(10) 文献5の三巻に示した多くの解剖図は病理解剖を行った結果である。

(11) 呉秀三 華岡青洲先生及其外科 二九七〜三〇〇頁 一九二三年(大正十三年) 吐鳳堂書店 伝記叢書 一三五 復刻再版 一九九四年(平成六) 大空社 三〇〇頁によれば 兎口の手術に関する部分の最後に

他流ニテ伊良子氏(光頭。明和四年(一七六七) 外科訓蒙圖彙ヲ著ハス) 等ハ金属ニテ作りシ鑿ヲ用ヒ、吉雄(耕牛。阿蘭陀瘍科之書・紅毛膏薬方ヲ著ハス) 其他ノ瘍科ハ卷木綿ヲセシモノアリ。(後略)『(瘍科秘録)』

とある。このように吉雄流外科は後に華岡青洲の乳癌の手術を含む各種の手術に影響を与えたことがわかる。

(12) 文献1 二五七頁 富士川游によって講義録五巻を総括した部分を以下に記す。

吐法、汗法、下法、肛門吹薬法(肛門突薬法)、含漱、温泉療法、刺絡、カテテル応用、種痘法等で、中にも肛門突薬法はすなわち灌腸法にして、家猪の胃袋に木製の小円筒をつけたるものを用い、袋の中に薬汁を入れ、肛門にさしこみ、袋を絞りにて肛門に突入せしめるのである。又カテテルにつきては銀製のものの図を示して、それを説明を下して、『拵様秘事あり、紅毛の銀地金にて無之候てはならぬものなり、自由自在になるものなり、故に茎中に入れても少も不レ痛なり、和に知るものなし、吉雄氏これを知りて銀屋町甚太郎に教へ今長崎にて甚太郎一人是を作る代金一兩ばかり』と記してある。後年江戸にても杉田玄白などがカテテルを使用せしことは知られたる事実であるが、宝暦の末年には我邦にはカテテルの使用をしろものは尠なかつたのである。

その他、解剖の拳が医学上に重要なものであることを示すために、西洋医述巻三の中には人体解剖に関する記述があり、それには稍々精密なる図画を挿み、内臓、脈管などに就きて敘述してある。固より杉田氏等の解体新書が世に出でたるより十余年も前の著述であるから、術語には訳語を下さず、原語の儘になつてものが多いが、しかし西洋の解剖図を我邦に紹介せることはここに始まると称すべきである。

此の如く、主に内治の事を挙げたる外に、薬物の記載を始めとし、医術以外の事項をも所々に挙げてあるが、何れにしても西洋内科伝訳の始と言われる内科撰要が宇田川槐園の手にて世に公に行われしときから、ざつと三十年も前に、西洋の内科を我邦に伝えたのであるから、温恭合田先生の功績は我が医学史上に赫然として、千載不磨のものであると言わねばならぬ。